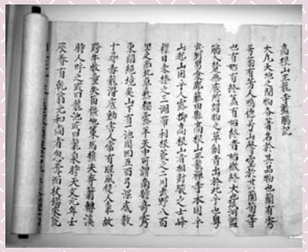
漆蒔絵鼈甲小箱

北条氏邦夫人である大福御前の所用と伝えられる小箱です。室町末期の工芸品で、鼈甲で造られた香入れ箱と伝えられています。蓋に竹と虎、三段重ねの箱の周辺に紅葉が施されています。付帯する金具の形状は十三弁の菊花文になっています。小箱の高台は、後世に付け足されたものと思われます。

高根山正龍寺濫觴記

正龍寺四世天叟長得和尚が記した正龍寺縁起で、天正十九年の徳川家康の田園山林寄進までが記されています。高根山の名の由来等が記されています。

巻物が古く、和本は、江戸時代後半の文政年間に書き写されたものです。



「廿八日注進状、朔日到来、委披見、仍憲政・景虎越国へ必定帰候由承候、殊厩橋焼候哉、弥満足二可有之候(中略)昌竜寺(正龍寺)辺へ打廻出候者、其擬可然候、然者、右衛門佐老母、昌竜寺へ被闕落候哉、不審成様躰候(以下略)」

これは氏邦文書の中で初めて正龍寺について記載されたものです。このころ、関東支配権をめぐって、関東管領上杉憲政と長尾景虎(後の上杉謙信)の軍が北条軍と対立していました。景虎は越後国から上野・武蔵に侵攻し、北条氏の本拠である小田原城を包囲したものの、落とせず帰陣しました。文書の内容は氏邦が厩橋(前橋)や正龍寺周辺の状況を確認し、事後処置を用土新左衛門尉へ命じています。そのころの寺院は公権力の及ばない避難所的な機能も持っていたことから、今回の騒乱で右衛門佐老母(康邦の母)は正龍寺に避難しています。

その後も上杉謙信の関東出兵は度々行われましたが、天正二年(一五七四)、上杉謙信の鉢形城攻めにより、正龍寺の伽藍は一宇(棟)残さず焼失しました。謙信引き上げ後、氏邦は早速仮の伽藍を設営し、再建に着手しました。このころ、氏邦は正龍寺に対し、藤田夫妻の弔いのために所領を寄進しています。

また、天正元年(一五七三)には第二子亀丸を布州和尚に預け、僧名鉄柱と号し出家させています(北条氏邦書状)。このことでも氏邦と正龍寺との密接な関係がうかがえます。

正龍寺再建に関する史資料は存在しませんが、氏邦の手厚い保護により順調に進んだものと思われ、謙信の侵攻以後は、後北条氏の上野国進出に伴い鉢形城周辺は戦火を被ることが少なくなりました。この時期は正龍寺にとってもつかの間の平和であったのかもしれません。

天叟長得和尚が四世正龍寺住職となったのは天正十五年(一五八七)で、豊臣秀吉が九州平定を成し遂げ、いよいよ後北条氏への圧力を強めてきた年です。

天正十八年(一五九〇)三月一日、豊臣秀吉により小田原征伐の軍勢が京を出発しました。前田利家・上杉景勝らの北国軍は東山道を下り、同月十八日には上野国松井田城に到着し、城攻めを開始しました。四月二〇日に松井田城を落とした北国軍は五月十三日に鉢形城を包囲し、城攻めが始まりました。天叟和尚は戦火から逃れるため、秀吉の禁制(豊臣秀吉禁制)を得ました。

鉢形城開城に当たって、正龍寺の天叟和尚の役割は重要でした。天叟和尚は氏邦に対し開城するよう説得したのですが、藤田信吉が依頼したという説(管窺武鑑)や高見四ツ山(小川町)の禅僧香英が前田利家の命を受けて依頼したという説(正龍寺の由来)があり、定かではありません。六月十四日、氏邦は説得を聞き入れ、剃髪して宗青を号し、出家姿で前田利家の軍門に下り、鉢形城は開城したのでした。

翌天正十九年(一五九一)には、小田原征伐後に関東入りをした徳川家康から田園畑山林二〇石の寺領寄進を受けました。正龍寺には江戸時代を通じてその石高が与えられました(徳川家康朱印状)。

文禄二年(一五九三)、鉢形城開城後、正龍寺で尼となった宗栄禅尼(北条氏邦室大福御前)が自害しました。出家の日より千日間の供養を執り行った後の自害でした。

正龍寺の墓地から流れでる沢は「女沢」と呼ばれ、鉢形城開城後、大福御前が正龍寺に落ち延びるために身を潜めたことから、この名が付いたと言われています。

慶長二年(一五九七)には、氏邦が能登七尾津向で病没しました。町田康忠ら元家臣六人は遺骨を持って帰郷し、正龍寺に葬りました。葬儀は、氏邦三男光福丸や元家臣らの参列の下、五世正龍寺住職繁室良栄和尚が執り行いました。

その光福丸は、慶長四年(一五九九)に早世してしまい、氏邦の血脈は絶えたと言われています。

第四世天叟和尚は、「鉢形城の由来」について五世繁室和尚との茶話から端を発し、「この記を編し、後世に遺さんと、寅碩(のち六世住職)侍者(そばに仕えている人)に命じ」慶長五年(一六〇〇)に書き残したものであり、慶長十五年(一六一〇)には「高根山正龍寺濫觴記」を執筆しています。これらの功績は大きく、正龍寺はもとより、名城鉢形城や北条氏邦に関する貴重な史料となっています。

仙女図(町指定)

北条氏邦が寄進したと伝わる仙女図です。本来、対となる仙男図も存在していましたが、盗難に遭い喪失してしまいました。粗絹地で、眉・目・唇・毛の生え際、裾の墨線に後世の加筆が認められます。

正龍寺に伝わる「北条氏邦公寄進惣目録」には、中国唐代柳宋元の筆とされますが、定かではありません。

染付香炉

正龍寺に伝わる染付香炉です。中型で、薄青灰白色の地に、暗青灰色の施釉で、口頸には青海波文、体部には三爻文(八卦の形状)と蓮華文が施されています。一般的に香炉は青磁製品が多いのですが、染付の香炉は珍しいものです。十六世紀代の中国明の時代の製品と思われます。

～正龍寺の文化財～

正龍寺には鉢形城主北条氏邦や藤田氏に関する資料が多く残されていますが、曹洞宗伝法史料である※三物(嗣書、血脈、大事)と※切紙が戦国期から江戸時代全般を通して大量に保管されていることが注目されます。

北条氏邦墓(右)と夫人大福御前墓(県指定史跡)

また境内にある北条氏邦夫妻の墓および藤田康邦夫妻の墓が県の史跡に、庭園にあるイロハモミジの変異型である「玉垂のカエデ」が県の天然記念物に、それぞれ指定されています(こちらは展示していませんので、正龍寺へ直接お出かけください)。

玉垂のカエデ(県天然記念物)

さらに、正龍寺周辺の山裾には古代の須恵器窯跡が確認されており、この須恵器窯跡群は末野窯跡群と呼ばれ、古代における武蔵国四大窯跡の一つになっています。

※三物と切紙について

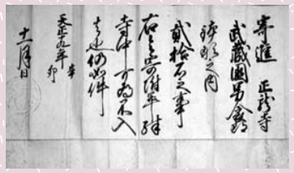
嗣書…師から弟子に与えられるもので、法が伝えられたことを示す系譜

血脈…伝法の際に授けられる系譜

大事…法を嗣ぐ際に嗣書・血脈とともに師より受けるもので、法の内容を簡略化した図で示したものが多い

切紙…三物とともに師から弟子へ渡す文書で、教義など実務的な内容を記したもの

徳川家康朱印状



徳川家康が関東入国後、正龍寺に対し寺領二〇石を寄進した朱印状です。徳川氏による地元民の懐柔と寺社領支配の貫徹を目的としています。

豊臣秀吉禁制

豊臣秀吉が小田原征伐において、後北条氏支配下の関東各地を平定するごとに、治安維持と人心収攬のために禁制を発給しました。この禁制により軍勢の狼藉を回避できることから、各寺社は競ってこれを求めました。同様のものが折原の東国寺、城立寺、鉢形周辺にも出されています。

日付が入っていないことから、事前に用意していたものと思われます。

刀銘「金房政定」

江戸時代に編纂された「新編武蔵風土記稿」には、藤田康邦所用と記されています。軍刀にするためにやや短くしています。

銘の「金房」は、室町時代末ごろの大和国(奈良県)で活躍した刀工衆で、相州伝の作風が特徴といわれています。